

郵便物が届いた。A4サイズが入る大きさの封筒だった。封を開けてみた。中から、「国語教室通信 扉」というタイトルの冊子が出てきた。素敵な表紙だった。そこには、中学生が真剣に学習している様子がわかる写真があった。

似たようなものを見たことがある。「国語教室通信 窓」である。同じように表紙には、生徒の写真があった。こちらは、楽しそうに学習している様子がわかるものだった。「窓」は、私が30代後半から40代前半の頃に実践していた国語通信である。知り合いの先生方を中心に差し上げた。今では、自分の分しか残っていない。

「扉」の先生にも、「窓」を贈った。この先生は、教職5年目で現在の学校が、まだ2校目の若手教員である。元々知り合ったのは、テニスコートだった。彼は、ソフトテニス部の顧問をしていた。話すうちに、国語の先生だとわかり、国語の話をするようになった。職場が違うこともあり、度々会うような関係ではない。それでも、短時間の会話の中で感じるものがあったのだろう。

彼には、応援者がいた。もう一人の顧問の先生と校長先生、そして私の知り合いの国語の先生である。そもそもは、もう一人の顧問の先生と知り合いだった。校長先生は、私の同級生だった。これを縁というのだろう。この校長先生が、彼の授業を参観する機会をつくってくれた。研究授業である。実際に授業を見てアドバイスをした。

彼が異動となった。初めての転勤である。南会津の中学校だった。私も教頭時代に南会津には大変お世話になった。研究授業の相談がきた。電話やメールでやりとりをした。先日は、久しぶりにメールが届いた。

誠に勝手ながら、昨年度の成果物を郵送しました。高澤先生に見ていただきたいと思い、冊子にまとめてみました。内容的に未熟な部分があるかと思いますが、ご覧いただければ幸いです。

私の「国語教室通信 窓」の影響を受けているのはすぐにわかった。彼のような若手の教員に、何かしらの影響を与えていたら、大変ありがたいことである。2校目ですでにこのような実践をしているのだから、すばらしいというかすごいと思う。これからがますます楽しみである。

彼には、『人生は、燐燐と 校長室だより100選』にも登場していただいている。195ページの「サイン」である。そこには、このような一節がある。

その書籍を出すきっかけを与えてくれた若手の国語教員には、〈〇〇〇〇君へ 教育に愛を！ 授業に心を！ いつまでも期待しています〉と書いた。

「扉」の先生が、これからどんな先生になっていくのか楽しみである。メールの文面には、今年度は、学級通信を100号、国語教室通信を50号出すことにしましたとあった。並大抵の努力ではない。3月には、製本された学級通信が届くに違いない。これからも応援していきたい。